

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

本当はいない船乗り。

### 【作者名】

M

### 【あらすじ】

父に言われたあの時の言葉。

あのころは信じていた。できもしないのに。

しかしある日。その夢は叶った。

てかだれだこのシンシン青頭。

## 船乗りの夢

『なあ、。お前、将来どんな事をしたい？』

夢に出てくる父との記憶。

「海にいきたい！」

『そうか、海にいきたいのか。海にいつて何がしたい？』

「船にのりたい…かな。」

『船にのりたいのか！よーしっ…』

『14歳になったら海を操るぐらいの立派な船乗りにしてやる！』

「やった!!」

なんて適当なことを言う父。それでも、自分は信じていた。

「14歳になりました。てなわけで、かっこいい船乗りになるために異世界にいつてもらっつぞ」

そんな父が、またもや適当なことを言っていた。

「…っつてまてい…っつてい…っつてい…っつてい…」

「いやな、ちょうど船乗りを探してる世界がだな」

「どういづことなの…!!」

「そんなことはどうでもいいんだよ！早く、異世界にいくぞー！」

「えー…てかその前にどうやっていくんだ？」

「そこに冷蔵庫がある」

「……ん？」

「その冷蔵庫にはコンセントがありません。」

「……？」

「そもそもそれは冷蔵庫ではありません」

「……!？」

「それは異世界への扉（消費アイテム）です。」

「消費アイテムってなんだよ！」

「仕様だよ！」

「えー……」

「つづー！つづー！いわずっ！とっつとといけい！」



しかしすぐに

「わがまま言っでごめんね。」

と謝る。何か事情があるのだろうか。

と、そんな事を考えていると、青髪のツンツン頭がこっちに向かってくる。

えっと……話の内容から察するに危ない事をするのかな。

「……どっかお気をつけて。」

別に語尾にはてなマークはないんだからねっ。

自分が放ったその言葉に青頭は

「はいっ……」

と元気よく答えた。

そして、茶髪以外の四人 残りの一人は黄色の人間 は船からおりる。

残るのは、呆然としている俺と何やら悲しい顔をしている茶髪の少女だけ。

えっと……

「……いい天気ですね」

やべえ！失敗した！なにこれ死にたい！

「ふふっ、そうね。たしかにいい天気だわ。」

茶髪の彼女はこちらを向いて微笑んだ。

その美しく、しかし悲しげがある笑顔に俺は見とれていた。

# ぼーけんのしょ 1

「ふふっ。ありがとね、私が変わったから慰めてくれようとしてくれたんでしょっ？」

「そんなことはないです。ただ気まずかっただけで……」

「結果的に慰めてもらえたからいいわよ。」

「あっ……その……ありがとうございます。」

大人のお姉さん相手じゃあそんなに考えて言葉はだせんのだよ。

しかも美人さん。

「お礼は「ちちらが言っべきよ、ありがとね。」

そう言っつて「ちちに、さきほどより悲しみのない美しい笑顔を向ける。」

それに見とれていた自分は

「あっ……どついたしまして。」

なんて言葉しか言えなかった。

…でも、やっぱり悲しい顔だな。

「あの……お姉さん。何か困っていたりしたら話を聞きますよ？」

俺のばっきゃろおお!!そんなこと言ったって話すわけないじゃないかああ!!

「……そうね。親しい人よりも、あまり知らない人のほうが話しやすいし。ちょっと聞いて欲しいわね。」

……さっきまでの俺グッジョブ!

「私ね。変なのよ。」

変?どついついとだ…。

「なんだか、記憶が曖昧でね。ミレーユ…金髪の人がね、笛を吹いたら、私が黄金の竜になっちゃってっていう記憶があるのよ。」

「黄金の竜……ですか」

「うん。それでね、いきなりのことだからパニックなっちゃうのよ。でも体は勝手に、動いていく。」

「違う場所の記憶かもしれないじゃないですか」

「いいえ、その前にこの船で、ムドーを倒しにいく話をしてた記憶もあるのよ。船の操縦士は違ったけどね。」



「違う操縦士……ですか？」

「うん。君みたいな若い子じゃなくて、おじさんって感じの人だった。」

「お、おじさん……」

「ふふふっ。それでね、自分の思い通りには動けない。でも竜になる」とはわかっている。「そのままついて行ったら、みんなにばれちゃう。」

「ばれてもいいじゃないですか？」

「ばれて、もしもみんなが私のことを怖がったりしたら、私何をしちゃうかわからないもの。」

「ならしっかりと心がければ……自分の思い通りには動けないのか……」

「なんとも難しい……」

「……ありがとね。君のおかげで少しは気が楽になったわ。」

「お役にたてたのなら幸いです。」

「あら、もうこんな時間……もうすぐ呼ばれるかもしれないわ。準備してくるわね」

「はい。気をつけてくださいね。」

「ありがとう……。あ、あ、お姉さん」「じゃなくて、名前で呼んでくれると嬉しいわ。じゃあね。」

そういつて茶髪……バーバラさんは船から降り、広い場所に移動した。

「バーバラさん、か。最近の中二病は凝ってるんだなあ。」

## ぼづけんのしょ2

未だにバーバラさんは草原に立っている。

「くっ……!!」

バーバラさんが苦しみだした。きつと右手がああてきなやつなのだろう。

「はあっ…はあっ…!!」

すごい。まるで本当に変わりそうな感じた。「ここまで演技ができるのならば将来は女優を志したほうがいいんじゃないかね。

「……。」

いきなり静かになった。賢者タイムかな。なんか体がぼやぼやしてるな。

まじでドラゴンになってる!?

ちよっ、まっ、うええええ!? アイエエエ!? ナンデ!?

「グギヤアアアオ!!」

バサッ……バサッ……。

一つ、大きく吠えたあとに、彼女は飛び立った。

「これまじで魔法とかあるん……?」

「てなわけで魔法を試してみようとおもっ…」

もしここが『ゲームの世界』ならば、よくある念じたらウィンドウがでてくるとかがあるのだろう。もしくは頭に浮かんできたり。

というところで……でてこいーウィンドウウウウウウ!!  
ってうおっ!!頭に何かが……。

1 ミズキ

いせかいのしょうねん

船乗り

しんまい乗組員

なんだこれ!? ドラクエみたいなウィンドウきたこれ!  
これで名前を押す動作をすれば……でてきた!

レベル…15

ちから…97

ずばやさ…80

みのまもり…255

かしこみ…60

かつこよさ：40

さいだいHP：800

さいだいMP：200

こうげき力：200

しゅび力：1%い7d6392\$1

Eしんまいの服

Eしんまいの帽子

Eしんまいのバツジ

かつこよさ40か！はっはっは！

余計なお世話だよ！！

てかなんだよ！みのまもり255て！HP800て！！かしこさ6  
0？余計なお世話だわ！！

しゅび力なんてみえてないよ。

服装もいい感じだね。ここからもついついかいボタンを押せば……

ふなのり

……この画面は知らないな。ドラクエじゃないのか？それとも知  
らないタイトル？

俺とだけしかやったことないからなあ……。

もう一回押したら……

ウオタラ                           ウオタガ                           ウオタジャ

スプレッド                           スプラッシュ                           アクアレイザー

ウンディーネ                           ファーストエイド                           レイズデッド

残念だったな！もう驚きはしない！

とことん水魔法だな。てか回復魔法も水なのね。

バーバラさんが帰ってくるまでに色々ためしてみるか。それに中二病って思ったこと謝んなきゃいけないし。

まずは最初に……ウオタジャってやつをやってみよう！名前からして水だし！

ミズキ    は   ウオタジャ   を   となえた   !!

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

ん？なんか揺れてる……地震かな？

ドドドドドド……ドザアアアアア!!

……別に水が大量にできて近くにあった島が飲み込まれたなんてことはないよ。ほんとだよ。

こんな調子でこのあと大丈夫なのかよ!!